

中国語の「補語」教授法に関する試み

張 文青

アブストラクト

「補語」は中国学習者にとって、一つの難関である。本論文では、まず第一に、中国語の補語とは何かを論じる。第二に、補語の定義や種類、現在日本の多くの教材で用いられている「程度補語」と「状態補語」を再分類し、学生が補語のどの点で理解困難に陥っているかを取り上げて分析する。第三に、結果補語や方向補語、可能補語の定義、構造的特徴、三者の関係、結果補語、方向補語の可能補語への変換条件などについてとりまとめ、結果補語と方向補語に関する具体的教授法を提案する。第四に、助動詞“能”形式を用いた可能表現と可能補語の相違など、学習者が混乱しやすいところを整理し、可能補語の教授法に関する筆者の提案、(語⇒連語化した補語⇒フレーズ⇒コンテキスト表現)とその応用、展開に関する教授法を紹介する。

キーワード：結果補語、方向補語、可能補語、連語化した補語、コンテキスト表現

1. 補語とは何か

世界中の中国語学習者にとって、習得が難しく感じられる中国語文法事項の一つとして「補語」がある。「補語」とは何か？沈家煊(2010)は、「補語」という言い方は、本来西洋語文法の complement を訳したもので、狭い意味での complement は、ただ単に連動動詞 be の後ろの補足説明の役割を果たす部分を指し、広い意味での complement は、述語における動詞以外のすべての必要な部分を指す、としている。例えば、She is a little girl. の a little girl の部分；He is playing in the ground. の in the ground の部分である。

朱德熙(1982)は、「意味の面からいえば、目的語の役割は、動作に関与する事物(受動者、間接関与者、道具など)を示すことにあり、補語の役割は、動作の結果あるいは状態を述べることにある。中国語の補語は、述語動詞或いは形容詞の結果、状態、実現の可能性、実行回数、時間的長さなどを補足説明する部分を指す」としている。

また、劉月華(1983)は、補語は、動詞または形容詞の後に置かれ、主に動詞または形容詞に対する補充説明を行う成分である。目的語もまた動詞の後ろに置かれるが、目的語と補語の違いは明瞭である、としている。すなわち、目的語はふつう動作の及ぶ対象を表し、そのためその多くは名詞性をもつのに対し、補語は、主に動作に対して補充説明を加えるもので、そのため、数量補語を除けば、多くは非名詞性を有する、という。劉月華は、補語は意味上、構造上の特徴に基づき、次の6種に分けられる、としている。

- | | | |
|---------|---------|-------------|
| 1. 結果補語 | 2. 方向補語 | 3. 可能補語 |
| 4. 状態補語 | 5. 数量補語 | 6. 介詞フレーズ補語 |

補語の分類に関して、本稿の筆者は、2.1 節に援用する『対外漢語語法大綱』の分類方法を賛同し、補語を8種類に分類して教授することを基本姿勢としている。

また、補語は、外国人向け中国語教育において、大変重要な地位を占めている。補語は外国人向け中国語教育の教材の中で使用される頻度が非常に高い。統計によると(呂文華 1999: 59)、北京言語学院現代中国語読解教材(初級、中級、上級)の主なスキットの中で、各種補語の総数は3,882句あり、単文総数の13.245%を示している。補語の使用頻度は形容詞述語文や名詞述語文、主述述語文よりも高いだけでなく、“把”構文(単文総数の0.488%)や“被”構文(単文総数の7.462%)、“是”構文(単文総数の0.638%)、“有”構文、“比”構文、連動文、兼語文など各種特殊動詞述語文よりも高くなっている。

2. 補語の分類及び学習難点

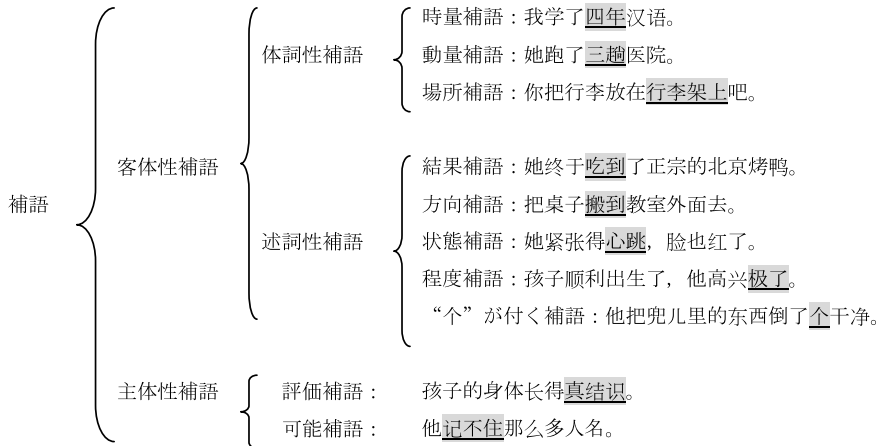
2.1 補語の分類

補語の分類に関しては、『対外漢語語法大綱』は、補語を8種類(結果補語、方向補語、状態補語、可能補語、時量補語、

動量補語、数量補語、介詞フレーズ補語（中国語：「介賓補語」、例えば、“生于北京（北京に生まれ）”、“飞往上海（上海に飛）”）に分けている。補語は、構造上の特徴により種類が分けられている。

類型の分け方や名称の付け方に関しては、1958年に「対外漢語教學語法体系」で定められたものである。呂文華（1999：59）は、「補語の類型は構造の特徴によって決め、名称は意義によるものである。この類型の分け方や名称の決め方は、実に対外中国語教育語法体系設立の一大成功である」と称賛している。

また、張黎（2006：181）は、補語を次のように分類している。



上述した中国語の「補語」の名称や類型は、学習者にとって実に複雑で覚えにくい。特に、状態補語、結果補語、方向補語、可能補語が難しく感じられ、誤用例も多い。APU（立命館アジア太平洋大学）の学習者は、補語の使い方に関して常に混乱を感じ、自信がもてないことを訴えている。そこで、本稿では、補語体系に属する結果補語や方向補語、可能補語を中心に、また、可能補語と助動詞“能”形式可能構文との文法的意味及び構造的意味の相違を比較しながら、教授法を考えたい。

2.2 よく使われる補語

現代中国語表現の中ではどのような補語がよく使われているのか。「現代漢語句型統計と研究」（呂文華 1999：60）の統計によると、中国で使われている主な読解教材には動詞述語文が総数で 14,401 回現れている。上記 8 種類の補語の使用頻度には大きな差がある（表 2.2-1 参照）。 **表 2.2-1 各種補語の使用頻度**

	補語の類型	フレーズ総数	動詞述語文の総数に占める割合 (%)
1.	方向補語	1,476	10.502
2.	結果補語	1,238	8.817
3.	状態補語	358	2.55
4.	可能補語	315	2.243
5.	動量補語	216	1.538
6.	時量補語	183	1.303
7.	数量補語	71	0.506
8.	介詞フレーズ補語	25	0.018

出所：『対外漢語教學語法体系研究』呂文華著（1999）、北京語言文化大学出版社

表 2.2-1 から分かるように、よく使われている補語上位 4 種類は、まさしく学習者が難しく感じている方向補語、結果補語、状態補語、可能補語と一致している。中国語の中上級レベルで言語表現力の欠乏感を味あわないためには、

これらの補語の構造的意味や文法的意味をきちんと学んで、応用できるようにしておかなければならない。

2.3 「状態補語」と「程度補語」

本稿の執筆に当たって、筆者の補語の類別に関する基本概念を述べておきたい。日本で使われている多くの中国語教科書や文法書では中国語の補語を5種もしくは6種類に分けている。すなわち、結果補語、程度補語、(状態補語、)可能補語、方向補語、数量補語である。前述したように、現行の『対外漢語語法大綱』では補語を8種類に分けており、さらに、現在の外国人向け中国語教学文法体系(中国語：対外漢語教学語法体系)では、動詞とその後ろに“得”を帯びる補語をすべて「程度補語」と称している。

『中国語レベル等級基準と等級大綱』(中国語：『漢語水平等級標準和等級大綱』)の「程度補語」に関する例文は下記の通りである。

- (1) 好得不得了(極めてよい、程度を表す)
- (2) 高兴得跳起来(飛び上るほど嬉しい、動作主に対する描写)
- (3) 笑得肚子疼(笑ってお腹が痛くなるほど、動作の状態を表す)

また、『実用現代漢語語法』(外語教学与研究出版社、1983)では、「程度補語」や「状態補語」を合わせて「情態補語」と呼んでいる。しかし、この「情態補語」の名称に関しては、抽象的で理解しにくいと、多くの専門家が指摘している。上記例文やその他の動詞の後に“得”を帯びるものを補語と定義したとしても、動作の程度を表しているだけではなく、幅広い意味を表している、と筆者は考える。

興水(1985: 385)は、動詞あるいは形容詞の後に置かれて、その動作・行為あるいは性質がどんな状態に達しているか(したがって程度でもあり得る)を述べる補語を「状態補語」とであると定義し、下記のような例を列挙している。

1. 補語は動作の状態を表述

笑得喘不过气来(息ができないほど笑う)
跑得满头大汗(汗びっしょりになるほど走った)

2. 補語は動作主に対する描写

高兴得跳上了天(天に昇るほど嬉しい)
肚子疼得喊救命(助けて、と叫ぶほどお腹が痛い)

3. 補語は動作による結果を表述

看看看得忘了吃饭(食事を忘れるほど読書する)
写字写得手疼(手が痛くなるほど字を書く)

4. 補語は動作に対する評価または判断

吃饭吃得很快(食事をするのが早い)
说得很流利(話すのがとても流暢だ)

筆者は、動詞または形容詞の後に“得”を用いたものは「状態補語」、形容詞の後に直接用いる補語は「程度補語」と区別すべきと考え、教学上の混乱をできるだけ避けるために、現行の多くの教材で取り上げている「様態補語」を「状態補語」と「程度補語」に二分化して教授することを基本にしている。

2.4 補語はなぜ難しいか

中国語の補語は8種類(結果補語、方向補語、状態補語、可能補語、時量補語、動量補語、数量補語、介詞フレーズ補語。本稿の筆者は『対外漢語語法大綱』の分類に賛同する立場を取る。)にも及んでおり、形式が様々である上、使い方も複雑である。学習者は比較的簡単な、初中級レベルで学習する結果補語や方向補語、可能補語は使えるが、やや難しい結果補語や複合方向補語、動作実行の可能性を表す可能補語になると、頭の中できちんと語の構造が整理できずにいる。結果補語や方向補語などに使える動詞、形容詞の組み合わせを難しく感じるほか、可能補語と助動詞「能、会、可以」による可能表現との使い分けができないことが多い。では、なぜ「補語」が難しいのか。学習上の困難なポイントを下に6つ示すことにする。

1.	各種補語はそれぞれの意味をもっている。
2.	補語の位置は目的語の前にあるものと目的語の後ろにあるものがある。 例：“雨下起来了”と“下起雨来了”（雨が降ってきた）/ “走进教室”と“走进教室来了”（歩いて教室に入る。）
3.	同類型の補語でも表している意味が異なる場合がある。 例えば、方向補語は、方向を表す意味と結果を表す意味の二つある。 例：“走过来”（歩いてやって来る、方向を表す）、“醒过来”（目が覚める、結果を表す。）
4.	補語の否定形は、“不”も使えるし、“没”も使える。 例：“ <u>不</u> 站起来”（立たない）、“ <u>没</u> 站起来”（立っていない。）
5.	可能補語と助動詞“能”との区別が難しい。 例：“看得见”（見える）、“能看见”（見ることができる）、看不见（見えない）、没看见（見えなかった）
6.	ある種の補語は状語の形式に替えることができ。 例：“吃惊 <u>得</u> 看着她”→“吃惊 <u>地</u> 看着她”（訳：驚きのあまり彼女をじっと見ている→びっくりした顔で彼女を見ている）。表している意味の多様性や違いが学習者の理解を妨げている。

以上取り上げた6つの点は、中国語学習者にとって大変難しく感じられるものである。これらを克服するために、補語の教授法に関する試みを紹介していきたい。

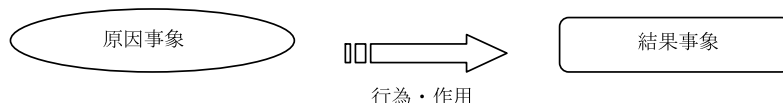
3. 結果補語、方向補語、可能補語の定義と教授法の試み

補語に関する教授は、いうまでもなく、簡単なものから比較的難しく感じられ、学習者の母国語の言い方とかけ離れていて理解しにくいものへと、徐々にレベルを上げていくことが大切である。したがって、教える側にとっては、簡単な補語から比較的難しい補語の意味や構造、使う場面などを整理してから、学習者にステップ・バイ・ステップで教えて行くことが必要だと考える。この節ではまず、結果補語、方向補語、可能補語の定義、構造的特徴を論じ、そして、教授法の試みを紹介することにする。

3.1 結果補語とは何か

結果補語は、動作或いは行為によって生じた結果を表す。形容詞及び動詞だけが結果補語になれる。結果補語の構造の多くは、「述語動詞 V+結果補語 C」となっている（以下「V+C」構造と示す）。例えば、“学完（学び終えた）”、“走累（歩き疲れた）”、“热昏了（暑くて朦朧としている）”、“累倒了（疲れて倒れた）”などがある。ただ、“热昏了”、“累倒了”のように、述語として使用される形容詞はかなり少なく、限定されていると言えよう。

石村（2000）は、「V+C」構造のプロトタイプは「使役」の概念を含んでいるとしている。影山（1996）は、「使役」の出来事は、通常ある実体が別の実体に何らかの働きかけを行い、後者がある変化を経て、結果状態へと至る、というように連鎖的に展開することであると論述している。これに従って、安元（2009：25）は、「V+C」構造を原因事象と結果事象を想定した。



また、劉月華（1986）は、中国語では動作または変化を通じて生じた、或いは生じようとしているある具体的な結果を叙述する場合には結果補語を用いなければならない、そうでないと語義不明になってしまうという。原因事象は動作主が物事を成し遂げようとする思い・意図である。動作の結果・結果事象は結果補語になる。例えば、

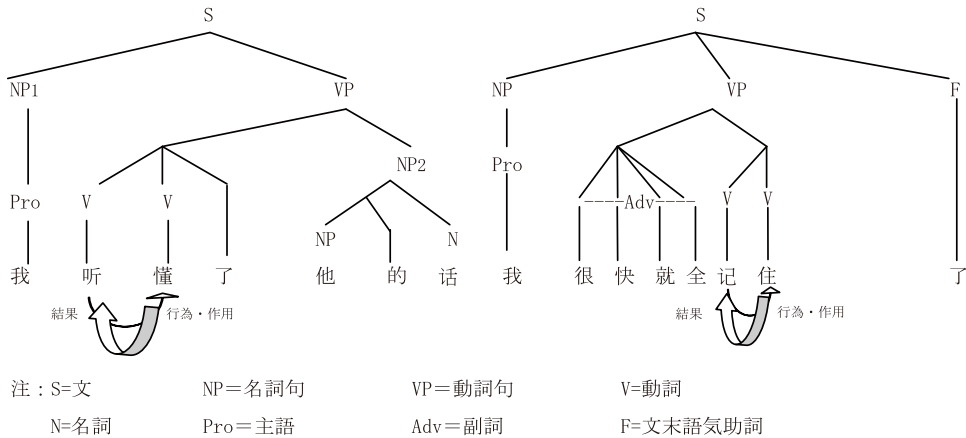
- * 他说得很慢，所以我听了他的话。
 他说得很慢，所以我听懂了他的话。

(彼はゆっくり話しているので、私は彼話を聞いて、分かった。)

* 这课的生词不多而且很简单，我很快就全记了。

这课的生词不多而且很简单，我很快就全记住了。

(このスキットの新生単語は多くはないし、しかも簡単なので、すぐ全部覚えた。)



さらに、劉月華（1986）は次のことに注意を促している。結果補語と「完了」を表すアスペクト助詞“了”の働きは同じではない。アスペクト助詞“了”は、動作の完了を表すだけだが、結果補語は動作の完了を表すだけでなく、動作が完了した後に生じたある具体的な結果をも表す。そのため、結果補語を用いるべき場合に、もしそこを“了”で置き換えると文意が明らかでなくなってしまう。例えば、

* 这个发音我一直发不好，今天终于发了。

这个发音我一直发不好，今天终于发好了。

(この発音はずっとうまく発音できなかったが、今日はやっとうまくできた。)

劉月華（1986）によると、結果補語の表す意味は二つに分けられる。

A 類結果補語：ほとんどの結果補語は、ある動作を通じて人または事物に変化を生じさせること、或いは別の動作を行わせることを表す。すなわち、このタイプの結果補語は、「人」または「事物」を説明する。例えば、

(4) 我们把路边的小麻雀救活了。

(私たちは道の端にいたスズメの命を救った。)

この文の意味は、私たちが「救う」という動作を通じて、スズメを「生かした」ということである。

(5) 他们把盘缠几乎都花光了。

(彼達は途中で使うお金をほとんど使い果たした。)

この文の意味は、彼達が「(お金を) 使う」ことで、お金がほとんど「なくなった」ということである。

B 類結果補語：このタイプの結果補語は、動作を説明するだけで「使役」の意味²を持たない。

(6) 我们学完语法，就要进入应用部分了。

(私たちは文法を勉強し終って、もうすぐ応用部分に入ることになる。)

(7) 农民工们在城里找到了工作，住也住惯了，但心里还是惦记着家乡的老老小小。

(出稼ぎ労働者達は都市部で仕事も見つけ住み慣れたが、心の中で故郷の家族を心配する。)

例文(6)、(7)のように、「完、到、惯」は動作の完結、完了、目標達成、結果の首尾を表すだけで、動作が人、また

は事物に対してどのような結果を生ぜしめたかということは表さない。劉月華 (1986) によれば、このような「V+C」構造は、文法構造上から見ても、また意味機能上から見ても、動詞の意味に焦点を当てている (ただし、構造の中心は述語動詞であり、意味の中心は補語動詞或いは形容詞である。)

3.1.1 結果補語に常用される動詞、形容詞

結果補語の構造としては、粘着型動補構造の一つとして、動詞+動詞 (V+V)、動詞+形容詞 (V+Adj.) の形がある。ほとんどの形容詞は補語になれるが、結果補語になれる動詞は比較的少なく、よく使われるものとしては下記の動詞がある (表 3.1.1-1 参照)。結果補語を学ぶ際に、学習者に下表にある常用される動詞と形容詞をまず説明し、記憶させる必要があると考える。

3.1.1-1 結果補語になれる使用頻度の高い動詞

1. 見 (見える)	2. 开 (開く)	3. 完 (完結、尽きる)	4. 会 (できる)
5. 到 (至る)	6. 住 (止める)	7. 懂 (理解する)	8. 给 (与える、あげる)
9. 慣 (慣れる)	10. 动 (動く)	11. 掉 (完結する、無くす)	12. 光 (完全に無くす)
13. 丢 (なくす)	14. 死 (死ぬ)	15. 倒 (倒れる)	16. 走 (立ち去る、いなくなる)
17. 醉 (酔う)	18. 碎 (砕ける)	19. 够 (足りる)	20. 透 (透る、徹底する)

また、ほとんどの形容詞は結果補語になれる。以下に、結果補語によく使われる形容詞を列举する (表 3.1.1-2 参照)

3.1.1-2 結果補語になれる使用頻度の高い形容詞

1. 好 (よい、し終わる)	2. 坏 (悪くなる)	3. 对 (正しい、合う)	4. 错 (間違う)
5. 大 (大きい)	6. 小 (小さい)	7. 远 (遠い)	8. 近 (近い)
9. 长 (長い)	10. 短 (短い)	11. 轻 (軽い)	12. 重 (重い)
13. 多 (多い)	14. 少 (少ない)	15. 胖 (太い)	16. 瘦 (痩せている)
17. 饱 (十分になる)	18. 膩 (飽きる)	19. 干净 (きれいな)	20. 清楚 (はっきりした)

3.2.2 結果補語をどう教えるか

結果補語の多くはB類結果補語になると、語彙の意味に変化をきたす。結果補語としてよく使われる動詞 (V+V) の後の動詞をいくつか下に列举する。使用頻度の高い一部の動詞や形容詞を教える順序と動補構造の前に使われる動詞の難易度を易→難 (段階Ⅰ→段階Ⅳ) のように整理し、初級段階から中上級段階への順を下記のように提案する。よく使われる動詞とその結果 (動詞または形容詞) との組み合わせを教える際、日常生活や学習場面でイメージしやすい場面から比較的イメージしにくい場面へと展開していくことを提案する。

	基本的意味	常用される結果補語の組合	一部結果補語の例文
見	目や耳で知覚されたものがはっきりと認識される。→見て目に入る→動作が結果を得る。	<div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="margin-right: 10px;">I {</div> <div style="margin-right: 10px;">看见</div> <div style="margin-right: 10px;">II {</div> <div style="margin-right: 10px;">听见</div> <div style="margin-right: 10px;">III, IV {</div> <div style="margin-right: 10px;">梦见</div> <div style="margin-right: 10px;">听见</div> <div style="margin-right: 10px;">望见</div> <div style="margin-right: 10px;">遇见</div> <div style="margin-right: 10px;">瞧见</div> <div style="margin-right: 10px;">瞅见</div> </div>	<p>昨晚, 我<u>梦见</u>回故乡了。</p> <p>远远地就<u>望见</u>了山上的牛群。</p> <p>饿了吧, <u>听见</u>饭味儿了吗?</p> <p>你<u>瞧见</u>我妈了没有?</p> <p>一进教室, 就<u>瞅见</u>他了。</p>

到	1. 動作が目的に到達	<div>I { 见到 看到 吃到 学到 买到</div> <div>II { 找到 借到 接到 还到</div> <div>III { 弄到 搞到 骗到</div>	<p>找到你的钥匙了吗？</p> <p>昨天我终于借到了那本小说了。</p> <p>在车站接到了我的老同学了。</p> <p>把书还到图书馆。</p> <p>音乐会的票弄到了吗？</p> <p>好不容易才搞到了几张票。</p> <p>我把他的票骗到手了。</p>
	2. 動作がいつまで続いたかを表示。目的語は必ず時刻を表す語句。	<div>I { 聊到 谈到 打到</div> <div>II { 排到 等到 延到</div>	<p>昨晚我们聊到深夜才睡觉。</p> <p>下午打球,一直打到天黑。</p> <p>排队排到凌晨两点多。</p> <p>婚礼延期延到哪一天谁知道呢！</p>
	3. 事柄、状態が発展、変化して到達した程度	<div>I { 开到 发到 传到</div> <div>II { 闹到 升到 僵到</div>	<p>花儿开到一半儿了。</p> <p>老师,卷子还没有发到我这儿。</p> <p>把试卷传到前面来。</p> <p>事情已经闹到法院去了。</p> <p>他们的关系僵到什么程度了？</p>
	4. 動作を通じて事物をある場所に到達させる。目的語はかならず場所を表す語句。	<div>I { 还到 回到 放到 送到 坐到 飞到</div> <div>II { 坐到 搬到 运到 挪到 漂到</div>	<p>田中把杂志还到报架上了。</p> <p>你坐巴士坐到终点站就行。</p> <p>北京飞到上海要多长时间？</p> <p>把东西搬到我房间里吧。</p> <p>出口的货物运到港口了。</p> <p>一个花瓣漂到了我的桌子上。</p>
在	1. 動作を通じて人または事物をある場所に位置させること。	<div>I { 坐在 住在 写在 记在</div> <div>II、III { 抄在 排在 出在 发生在</div>	<p>我坐在他的座位上了。</p> <p>作业写在黑板上了。</p> <p>我排在第二个。</p> <p>这个故事发生在1998年。</p> <p>他出生在“文革时期”。</p>
	2. 事柄が起こった時間を表す。		
好	動作が完了し、かつ満足すべき状態に達する。	<div>I { 学好 写好 吃好 做好</div> <div>II { 放好 弄好 修理好 整理好</div>	<p>学好外语走遍天下。</p> <p>我们吃好了,非常感谢。</p> <p>我的手机已经修理好了。</p> <p>把家整理好,再出门。</p>
着	1. 動作が目的に到達したことを表す。口語に用いられることが多い。	<div>I { 找着 借着 睡着</div> <div>II { 猜着 弄着 点着</div>	<p>这本书好不容易才借着。</p> <p>我猜着他的心思。</p> <p>我要的资料你弄着了没有？</p> <p>火,点着了,开始做菜吧。</p>

	2. ある動詞または形容詞の後に用いられると、動作或いはある状況が人または事物に対して好ましくない結果を生じさせることを表す。	<div> <div>III、IV</div> <div> <div>餓着</div> <div>撐着</div> <div>累着</div> <div>燙着</div> </div> </div> <div> <div>III、IV</div> <div> <div>吓着</div> <div>热着</div> <div>凉着</div> <div>冻着</div> </div> </div>	休息一会儿吧, 别 累着 了。 别吃太多, 撐着 了。 那把壶很烫, 别 燙着 孩子。 他呆呆的, 一定是 吓着 了。 昨天衣服穿少了, 冻着 了吧? 他 热着 了, 头晕恶心。
住	動作を通じて人または事物の位置を固定させることを表す。	<div> <div>I</div> <div> <div>记住</div> <div>停住</div> <div>拿住</div> </div> </div> <div> <div>II</div> <div> <div>吓住</div> <div>挡住</div> <div>握住</div> </div> </div>	他的电话号码你 记住 了吗? 孩子, 把碗 拿住 了, 别洒了汤。 他 握住 我的手眼泪流了下来。

さらに、上級段階では、自動詞による結果補語構造と目的語に関する構文を教えてもよいと考える。自動詞は本来、事物を表す目的語をとれないにも関わらず、結果補語が加わると事物目的語をとれるようになる。例えば、

(8) 人山人海, 他们家**走丢**了一个孩子。

(人混みの中で、彼の家族は子供を一人見失った。)

(9) 她痛苦得**哭红**了双眼。

(彼女は悲しくて、目がまっかになるまで泣き腫らした。)

3.3 方向補語とは何か

各種統語形式の分析のうち空間移動を表す「述語 V + 方向補語 D」構造（以下は「V + D」構造と称す）の文法的意味および方向補語全般に関して、詳細かつ影響力の大きい文献として劉月華《趨向補語通解》（1998）がある。また、奥水（1985）、呂叔湘（1992）、卢福波（1996）、刘月华等（1998）、吕文华（1999）、吕冀平（2000）、郭春貴（2001）、李英哲（2004）、高橋（2004）、张国宪（2006）、沈家煊（2010）なども同分野における貴重な先行研究に数えられる。以下では、先行研究を参考に、初中級から中上級の学習者にどのように教えればよいのかという問題意識に立って、比較的学びやすく記憶しやすい教授法の試みを紹介する。

まず、単純方向補語と複合方向補語を列挙しよう（表 3.3-1 参照）。

3.3-1 単純方向補語及び複合方向補語表

	上	下	进	出	回	过	起	开	到
来	上来	下来	进来	出来	回来	过来	起来	开来	到来
去	上去	下去	进去	出去	回去	过去	====	====	到去

単純方向補語は A 類結果補語と同様に、「使役」の意味、すなわち動作が人または事物をある方向に移動させることを表す。他動詞の後ろの方向補語は動作の受け手の方向を表す（例文 10、11 参照）。自動詞後の方向補語は動作の仕手の方向を表す（例文 12、13 参照）。

(10) 鈴木从超市**买来**一些水果。

(鈴木さんはスーパーで果物を買ってきた。)

(11) 老赵到研究所**请回**一位专家。

(趙さんは研究所から専門家を招いてきた。)

(12) 他轻巧地**跳上**讲台, 对台下的人挥了挥手。

(彼は軽々と教壇に跳び移り、教壇の下にいる人達に手を振った。)








(13) 他大步流星地**走出**办公室。

(彼は颯爽とオフィスを歩いて出た。)

3.3.1. 方向補語をどう教えるか——提案1：単純方向補語と複合方向補語のイメージ

筆者は、方向補語を教える際の提案1として、教学上の便益性を考え、単純方向補語と複合方向補語の基本的意味と派生義、常用される動詞を整理し（表3.3.1-1参照）、学習者にそれぞれの方向補語のイメージを与えた上で理解させることを試みている。

3.3.1-1 方向補語の基本的意味と派生義

	イメージ	複合方向補語	基本的意味と派生義
上		上来、上去	1. 低 → 高、2. 開始・持続、3. 閉じる・閉鎖、4. 存在・付着、 5. 目的達成
常用される動詞：走、跑、爬、跳、拿、搬、挪、拉、放、送、追、递、举			
下		下来、下去	1. 高 → 低、明 → 暗、強 → 弱、動 → 静、2. 分離させる・離れる・離す、3. 一定の容量を有する、4. 固定・安定させる、5. 現れ始める・継続・発展、6. 高 → 低、近づく
常用される動詞：①下：留下、存下；②下来/下去：走、拿、跑、跳、爬、搬、挪、拉、放、送、递			
进		进来、进去	外 → 中への移動・到達
常用される動詞：走、跑、拿、搬、挪、放、送			
出		出来、出去	1. 中 → 外、隠れている → 現れている状態、発見、識別、 2. ない → ある
“出/出来”に常用される動詞：看、听、认、想、写、说、猜、分辨、制造、生产、展现 “出/出去”に常用される動詞：说、拿、搬、运、传			
回		回来、回去	ある動作を通じて、人或いは事物は本来のところへ戻る
常用される動詞：拿、走、跑、爬、跳、搬、挪、拉、放、送、还			
过		过来、过去	1. 経過・通過、2. 方向変え、3. ある場所 → 新たな場所、4. 適切な度を 超える
“过来”に常用される動詞：走、拿、搬、递、拉、醒、改、反、转 “过/过去”に常用される動詞：越、穿、飞、睡			
起		起来	1. 低 → 高（坐起来、爬起来、热闹起来）2. 分散 → 集中（集中起来、收拾起来、包起来）3. 開始・継続（笑起来、多起来、大叫起来、讨论起来） 4. 仮説の継続状態（说起来、写起来、用起来、学起来） 5. ある事物に対して評価・推測する（看起来、听起来、交往起来）

3.3.2 方向補語をどう教えるか——提案2：方向補語と目的語との排列関係の整理

筆者は、方向補語を教える際に、上記表 3.3.1-1 のように方向補語の基本的意味や派生義を理解しやすいように整理して学習者に示すと同時に数多くの例文を与えることを提案する。しかし、方向補語を教える際の難点の一つとして、方向補語と目的語の排列に関する問題が残っている。

日本で使われている多くの中国語教科書では、方向補語と目的語の配列に関して、単純方向補語であろうが複合方向補語であろうが、場所目的語は方向補語“来/去”の前に置くと、記されている。しかし、いわゆる **V+場所目的語+“来/去”** というのはあくまで鉄則である。場所目的語は“来/去”の前にしか置けないことはすでに多くの先行研究から明らかである。これに関しては、学習者も練習→間違い→訂正→再確認・再練習→習得という順でさしたる困難もなく身につけることができた。

しかし、非場所目的語がくる場合で、単純方向補語及び複合方向補語、さらに“来/去”が関係してくると、この目的語をどこに置くかをめぐり学生の誤用が多く見られる。

盧福波 (1996: 198) はこれを複雑な方向補語として、次のように述べている。

1. 目的語が一般的な人または事物を表す名詞の場合は、複合方向補語の間あるいは後ろのどちらでもよい。例えば、

走进一个人来 走进来一个人 (人が歩いて入ってきた)

递过一本书来 递过来一本书 (一冊の本を渡してきた)

2. 目的語が場所を表す名詞の場合は、複合方向補語の間にしか置けない。例えば、

走进图书馆去 * 走进图书馆 (歩いて図書館に入る)

搬上楼来 * 搬上来楼 (上の階に運んでくる)

3. 離合詞、目的語は複合方向補語の間に位置する。例えば、

聊起天来 * 聊起来天儿 (おしゃべりし始める)

转过身来 * 转过来身 (背を向けてくる)

筆者は、方向補語教授法の試みとして、目的語と“来/去”の排列問題をより分かりやすくするために、方向補語と目的語との排列関係を下記表のように整理した上で学習者に与え、同時に例文の説明も行うことを勧める (表 3.3.2-1 参照)。

表 3.3.2-1 方向補語と目的語の排列

	単純方向補語文の構文	例文
	A 目的語が場所語の場合	A 目的語が場所語の場合
1	V+場所目的語+“来/去”	周末 <u>到我家来</u> 吧。 (週末うちにおいで。)
2	V+方向補語 (“来/去”を除き)+場所目的語	行李 <u>搬下车</u> 了吗? (荷物を車から降ろしたか?)
3	前置詞 (向/往/朝)+場所目的語+V+方向補語	我们向地平线 <u>望去</u> ，那里落日艳红。 (私たちは地平線まで視線を伸ばした。 そこは夕日が鮮やかだった。)
	B 目的語が場所語ではない場合	B 目的語が場所語ではない場合
1	存現文の V+ “来/去”+非場所目的語	天上 <u>飞来</u> 一只展翅的老鹰。 (空から翼を伸ばしている一羽の鷲が飛んできた。)
2	V+非場所目的語+方向補語 (“来/去”含む)	她 <u>带护照去</u> 了吗? (彼女はパスポートを持って行ったか?)
3	“把”+非場所目的語+ V+方向補語 (“来/去”含む)	这年代了，谁还把户口本 <u>带来</u> ?

		(今の時代になって、誰が戸籍謄本を持ってくるのか?)
4	V+方向補語 (“進/出/开” の場合) +非場所目的語	老刘 <u>拿出</u> 介绍信, 给门卫看。 (劉さんは紹介状を取り出し、守衛に見せる。)
5	“把” +非場所目的語+V+方向補語 (“進/出/开” の場合) + (場所)	大家一起把新电脑 <u>搬进</u> 教室里吧。 (皆一緒に新しいPCを教室に搬入しなさい。)
	複合方向補語文の構文	例文
	A 目的語が場所語の場合	A 目的語が場所語の場合
1	V+方向補語+場所目的語+ “来/去”	货物已经 <u>运到</u> 港口 <u>去</u> 了吗? (荷物はすでに港に運ばれたか?)
	B 目的語が場所語でない場合	B 目的語が場所語でない場合
1	V+非場所目的語+複合方向補語 (後の方向補語は動作主の移動方向を表す)	她 <u>拿</u> 一件衣服 <u>出来</u> 。 (彼女は一枚の服を持って出てくる。)
2	V+方向補語+非場所目的語+ “来/去” (動詞の後の方向補語は動作の方向と結果を表す)	她 <u>拿出</u> 一件衣服 <u>来</u> 。 (彼女は一枚の服を出してきた。)
3	V+複合方向補語+非場所目的語 (必ず完了した動作の方向を表す)	她 <u>拿出来</u> 一件衣服。 (彼女は一枚の服を出した。)

「V+非場所目的語+複合方向補語」配列の3つのパターンでそれぞれ3つの意味を表す構文ができる。それは、

- 1) 動作主の移動方向に関する表述
- 2) 動作の方向と結果を表す表述
- 3) 完了した動作の方向を表す表述

この排列の違いにより意味が異なる3点が学生にとって、最も理解・記憶しにくいところであろう。教える側としては、感性的に理解しやすい例文を取り上げ、その微妙なニュアンスの違いを理解させながら、イメージを与えることが大切だと思う。

しかし、ここで学習者に“她拿出来一件衣服。(彼女は一枚の服を出した。)”のような構文は非常用句であることを告げるべきである。魯健驥 (1984) の考察によると、1,141 語複合方向補語の構文の中で、目的語が“来/去”の前に (例えば、“他买回一支笔来。(彼は筆を一本買ってきた)” くる例が 5.4%を占めるに對し、目的語が“来/去”の後ろに (例えば、“他买回来一支笔 (彼は一本の筆を買って帰ってきた)” くる例はわずか 0.5%にしかすぎない。

ゆえに、筆者は方向補語を教える際に、“她拿出来一件衣服。(彼女は一枚の服を出した。)”のような構文は非常用句であるが、V+方向補語+非場所目的語+ “来/去”、“她拿出一件衣服来。(彼女は一枚の服を出してきた。)”はよく使われている表現であることを学習者に繰り返し強調する必要があると考える。

3.3.3 方向補語をどう教えるか——提案3：方向補語の初級段階の教え方

「V+上 / 下 / 进 / 出 / 回 / 过 / 起 / 开 / 到 (“上” 類詞とも呼ばれている)+目的語+ “来/去” 」という方向補語の構文は一番適応範囲が広い文型であることがすでに多くの先行研究で明らかになっている。したがって、3 番目の提案として、初級段階において方向補語を使う場面としては普通の生活に最も密着する場面から教えるのがよいという考えから、下記表 3.3.3-1 を提唱したい。

3.3.3-1 初級段階方向補語教える流れ

1.	単純方向補語	1) 回来 (帰ってくる) / 回去 (帰って行った) → 没回来 (帰ってきていない) / 没回去 (帰って行っていない) → 他从日本回来了吗? (彼は日本から帰ってきたか?)
----	--------	--

		2) 带来(持って来る) / 带去(持って行く) → 没带来(持って来ていない) / 没带去(持って行っていない) → 你没把写好的作业带来?(あなたは書き終えた宿題を持ってきていないの?)
2.	複合方向補語	1) 拿上来(持って上がる) → 拿上车来(車に持って上がる) 2) 搬下去(持って降りる) → 搬下楼去(下の階に持って降りる) 3) 带回去(持って帰る) → 带回家去(家に持って帰る) 4) 拿过来(持って来る) → 拿过一个面包来(一つのパンを持ってくる。) 5) 走进来(歩いて入る) → 走进教室里来(歩いて教室に入る)

上記単純方向補語や複合方向補語の例示に使った語や例文のように、初級段階では、一番広く使える形をまず一つ教えることが大切で、学習者が基本構造の特徴を把握し、場面に応じた展開・応用ができるようになってから、中上級段階で細かな使い分けに言及する方がよいと筆者は考える。

3.4 中国語の可能表現

3.4.1 日中の可能表現

日本語の可能表現に関する意味分類の考察は盛んに行われている。標準語では、補助動詞「える」の文体差「れる・られる」を除けば、意味によって可能動詞と「することができる」などの形式を使いわけることがない。

日中可能表現における差異について、金田一(1957)は、可能表現を可能態と見なし、可能態とは「書く」に対する「書ける」、「見る」に対する「見られる」の形を指し、これらは全体が一種の状態性動詞であるという。そして、「この日本語の可能態をたとえばシナ語の可能態に比べる時、著しい違いは、細かい言い訳のないことである。現代の北京官話などでは、実に複雑で「タバコを吸えない」というような場合は、「まだ練習していないから」「不会吃烟」;「禁煙の制札が出ているから」の意味ならば「不可以吃烟」;もし「人形はタバコが吸えない」の意味ならば、「不能吃烟」となる」と述べている。

高橋(2008:135)は、現段階では、日本語の可能表現は受身形も含めると4形式である、としている。一般に「読む」の可能表現は「読める」、「読もうる」、「読むことができる」であり、受身形と同じ形の「読まれる」はそれほど多く使われないようである。また、高橋は、中国語では、よく単語の組み合わせにより可能を表す。この言語事実は日中両言語の可能表現を比較した場合、中国語は日本語に比べて多様であり、分析的であることを意味する、と述べている。

中国語の可能表現は基本的に助動詞の“能、会、可能、可以”形式と動作や行為の実現が可能かどうかを表す動補構造「可能補語」の二つの形式に分けられている。両者には同一点と相違点があり、互換性をもっている文もあれば、絶対に替えられない文もある。

すでに多くの先行研究で明らかにされているように、助動詞の“能、会、可能、可以”はすべて“可能”の意味を表せるが、可能補語が表している可能の意味と全く同じではない。本稿の4.1、4.2節では、助動詞形式の可能表現に最もよく使われている“能”形式可能表現を取り上げ、可能補語との意味上の違いや構文上の違いを再度整理することとする。

3.4.2 可能補語とは何か

可能補語の定義については、張威(2008)は、「結果可能表現とは、動作主がある出来事またはある種の状態変化を実現しようとして動作を行う場合、その動作が行われた後、主体的または客体的条件によって、動作主の意図が思い通りに実現することができるかどうかを表す表現である。」と意味上の定義をしている。伊藤(2003)は上記のような可能の定義をやや発展させ、「一つは、話し手が現実に基づいて想像するという面である。もう一つは、その世界で動作・行為が実現するという面である。この二つの段階を凝縮して表したのが、可能補語である。」との見解を示し、意味上及び構文上における総括的な定義をしている。

張黎(2007)は、「可能補語の肯定及び否定の形式はみな主語の能力属性を表す。或いは主語の能力属性に対する判断であると言えよう」と記述し、構文上の定義を行っている。

可能補語に関する先行研究としては、劉月華(1980)、大河内(1980)、杉村(1997)、呂文華(1999)、呉福祥(2002)、

張黎(2007)、張威(2008)、高橋(2008)、安元(2009)などが挙げられる。可能補語の表す文法的意味に関しては朱徳熙(1982)や劉月華(1983)その他にしたがって、三つに分類することが一般的であり、筆者は下記のように3つの分類をそれぞれ整理する。

A 類可能補語	V + 得 / 不 + C / D
B 類可能補語	V + 得 / 不 + “了(liǎo)”
C 類可能補語	V + 得 / 不得(dé)

1. A 類可能補語の表す文法的意味

動詞と結果補語、または方向補語の間に、“得/不”を挿入するとA類結果補語を作ることができる。例えば、看懂(見て分かる→看得懂 / 看不懂(見て分かることができる/できない))；学会(学んでマスターする→学得会 / 学不会(学んでマスターできる/できない))；听出来(聞いて分かる)→听得出来/听不出来(聞いて分かることができる/できない)のように、結果補語、方向補語から可能補語への変換ができる。

A類可能補語は、「主体的条件(能力、力など)または客観的条件(ある結果または方向の)実現を許すかどうか」を表す。例えば、

(14) 孩子还小，拿不动这么沉的东西。

(子供がまだ小さいので、こんな重い荷物をもてない。)

(15) 我才学了四、五个月的中文，还听不懂电视新闻。

(私は中国語を四、五カ月勉強したにすぎないので、テレビのニュースはまだ聞いても分からない。)

劉月華(1996: 481)によると、可能補語と助動詞“能”の表す意味は全く同じではない。「情理から許されるかどうか」、「許可するかどうか」という意味を表す場合、“能・不能”は用いられるが、A類可能補語は用いることができない。例えば、

(16) 外面在刮大风下大雨，你不能出去。(外は強風大雨ですから、あなたは出てはいけない。)

* 外面在刮大风下大雨，你出不去。

(17) 他们正在开会，小孩儿不能进去。(彼らはちょうど会議中なので、子供は入れない。)

* 他们正在开会，小孩儿进不去。

A類可能補語には肯定形“V 得 C”と否定形“V 不 C”³の両方の形式があるが、実際に用いられるのは主に否定形“V 不 C”で、疑問文を除けば肯定形が用いられることはあまり多くない。可能補語の肯定形は一般的に単独では使用されないのである。劉月華(1980)の統計によると、可能補語の肯定形と否定形の用いられる比率は4:750である⁴。したがって、ある種の客観的条件の影響で、動作の結果または方向の実現をなしえない場合は、可能補語の否定形を用いるのがほとんど唯一の選択であると言えよう(呂文華1999: 62)。

A類可能補語の肯定形は、主に次のような場合に用いられる。

① 質問の中に可能補語の形式があった場合、答えには可能補語が用いられることが多い。

(18) 问: 这些饭菜吃得完吃不完? (この食事は食べきれるか?)

回答: 吃得完。(食べきれよ。)

(19) 问: 这些资料看得懂看不懂? (これらの資料は見て分かるか?)

回答: 看得懂。(見て分かる。)

② ある結果または方向の実現がむずかしかったり、十分な確信がないことを表す場合は、A類可能補語がよく用いられる。動詞の前に、“也许(へかもしれない)、大概(たぶん)、说不定(もしかして~)”のような用語が付け加わることが多い。例えば、

(20) 那本杂志也许还买得到。(あの雑誌はまた買えるかも知れない。)

(21) 他大概听不懂我们的话。(彼は多分私たちの言葉/話を聞いても分からないだろう。)

③ 婉曲に否定の意味を表す場合に用いられる。

(22) 他的病不是药治得好的。(彼の病気は薬で治せるものではない。)

(23) 这里没一个人劝得动他。(ここには彼を説得できる人は一人もいない。)

④ 形の上では肯定形式を用いていても、意味上は否定形と何らかの関係がある。

(24) 那么贵的跑车我哪儿买得起。(あんなにも高いスポーツカーをどうして私が買えるのか。)

(25) 这么难听的话你也说得出口来。(こんなにも失礼な話を君は口に出して。)

上記②、③、④は肯定形式のA類可能補語の典型的用法であるが、このような用法は、すべて否定の意味と何らかの関係がある。すなわち、確信度が低いことや婉曲的な否定の意味を表す場合、或いは否定の言い方に反駁する場合には、肯定形式のA類可能補語は話者の口調を強調する表現になる(劉月華 1996: 482)。

可能補語は殆ど否定形で使われているが、「主体的条件がある結果または方向の実現を許す」という肯定的意味を言い表す場合には、ふつう「“能/可以”+結果補語C/方向補語D」(以下「“能/可以”+C/D」と示す。)の形式を用いる。

2. B類可能補語

①B類可能補語は、「V+得+“了(liǎo)”」からなるものである。「了」の本意は「尽きる、終わる」であり、「V+得+了」からなる可能補語は、あるグループの動詞⁵の後に用いられると、「了」はやはり“完(尽きる)”、“掉(なくなる)”などの結果の意味を表す。例えば、

(26) 今天她有事儿，来不了了。

(今日彼女は用事が出来たので、来られなくなった。)

(27) 房东对我们的好，我们总也忘不了。

(大家さんは私たちに大変よくしてくれたから、私たちはいつまでも忘れない。)

②「V+得/不+“了”」からなるB類可能補語は、“了”それ自体は結果の意味を表わさず、“V+得/不+了”全体が「主体的条件、客観的条件が(ある結果または変化の)実現を許すかどうか」を表す。例えば、

(28) 电车晚点，我们恐怕按时到不了了。

(電車が遅れて、私達はどうか時間通りには着けなくなった。)

③ V+得/不+了”は状況に対する推測を表す。例えば、

(29) 这么多东西你拿得了吗?

(こんなにも重い荷物なのに、もてるか?)

④「情理の上から許されるかどうか」或いは「許可するかどうか」の意味を表す場合は、

B類可能補語は用いられない。例えば、

(30) 小孩儿自己不能去，被拐骗了怎么办。

(子供は自分では行けない、誘拐されたらどうするの。)

* 小孩儿自己去不了，被拐骗了怎么办。

⑤ B類可能補語は、平叙文ではやはり主として否定形式が用いられ、対応する肯定の意味を表したい場合は“能”を用いることが多い。例えば、

(31) 这个辣菜大人能吃，小孩儿吃不了。

(この辛い料理は大人には食べられるが、子供には食べられない。)

⑥ また、B類可能補語は、主に口語に用いられ、書面語や正式な場合には、「“能/不能+V”、或いはA類可能補語、その他の言い方を用いることが多い。

⑦ B類可能補語を含む文はその構造的特徴は、A類可能補語を含む文と基本的には同じだが、次の二点に注意されたい。

1) 動詞、形容詞はA類よりB類と結合しやすく、様々な用語がB類可能補語を取ることができる。例えば、“減少、拖延、伸长、缩小”のような動補式の動詞、前に状語のある動詞、さらにはその他の補語をとっている動詞でさえもB類可能補語を伴うことができる。例えば、

(32) 他这个人，早来不了。(あいつは早く来っこない。)

(33) 那个队缺好选手, 他们赢不了。

(あのチームには強い選手がいないため、彼らには勝ち目がない。)

2) B 類可能補語は、“V+得/不+了”の間に程度副詞を挿入することができない。

3. C 類可能補語

動詞、形容詞の後に“得(dé)/不得(dé)”だけを補語として用いる。例えば、“去不得”(行ってはいけない)“看不得(見てはいけない)”, “急不得(焦ってはいけない)”などである。このタイプの可能補語は二つの文法的意味を表すため、C1 類と C2 類の二種類の C 類可能補語があるとも言える。

C1 類可能補語

C1 類可能補語は、「主体的条件、客観的条件が(ある動作の)実現を許すかどうか」を表す。すなわち、B 類可能補語の意味と同じである。例えば、

(34) [三仙姑] 羞得只顾擦汗, 再也开不得口。(趙樹理『小二黑結婚』)

([三仙姑] は恥ずかしさのあまり、ただ汗を拭うばかりで、もう何も言えなかった。)

(35) 他倒在太师椅上, 半天动弹不得。(馬烽、西戎『吕梁英雄伝説』)

(彼はゆったりとした旧式の椅子に持たれて、暫く身動きができなかった。)

C1 類可能補語は、現代共通語ではあまり用いられない。したがって、「主体的条件、客観的条件が(ある動作の)実現を許すかどうか」の意味を表す時には、“能/不能”、或いは B 類可能補語を用いる。例えば、

(a) 我今晚有个会, 音乐会去不了了。(今晚会議があるので、コンサートには行けなくなった。)

(b) 我今天晚上有个会, 音乐会不能去了。(同上)

C1 類可能補語の中のいくつかは、慣用語的なもので、前の動詞と固く結合してすでに一つの連語になっている。現代共通語で常用されるのは、

否定形：恨不得(～できないのがもどかしい)、怪不得(道理で、なるほど)、顾不得(構ってられない)、算不得(～のうちに入れられない)、巴不得(～したくてたまらない)

肯定形/否定形：舍得/舍不得(未練がない/名残惜しい)、记得/记不得(覚えている/覚えていない)、值得/值不得(～に値する/～に値しない)

C2 類可能補語

C2 類可能補語は、「情理の上で許されるかどうか」を表し、動詞、形容詞の後に用いられる(例文 36~37 参照)。しかし、「許可しない」の意味は、C2 類可能補語を用いて表すことはできず、“不能 V”を用いることになる(例文 38 参照)。

(36) 这种野生蘑菇可吃不得。(この種の野生のキノコは食べてはいけない。)

(37) 那种当官儿的咱们可惹不得。(そのような官僚を、私たちは怒らせてはいけない。)

(38) 刚吃饱饭, 不能跑。(食事をしたばかりで、走ってはいけない。)

* 刚吃饱饭, 跑不得。

可能補語について、上記 A、B、C(C1、C2) 類の構文的意味や文法的意味を述べ、さらに、“能/不能”との相同点、相違点を述べてきた。しかし、可能表現を用いる可能補語と助動詞“能/不能”との使い分けに関しては、まだはっきりしないという学習者も多いため、本稿の第 4 節で、もう一度整理することにする。

3.4.3 結果補語及び方向補語の可能補語への変換条件

結果補語と方向補語の可能補語への変換条件に関する研究がいまだ多く見られない中、安元(2009)は綿密な考察に基づき、優れた研究成果を発表している。安元は、結果補語から可能補語への変換条件として、結果補語の構造“V+C”の“V(原因事象)”及び“C(結果事象)”の両項目から結果補語が可能補語へと生成及び変換される条件を分析している。考察の結論として、下記のように記述している(安元 2009: 46-73)。

「V+C」構造を「V+ “得 / 不+C」構造に変換できる**条件1**は、
VCのV項(原因事象)は「自主的意味」特徴を持つ

「自主的意味」に関しては、影山(1996)の「意志性」の有無による動詞の分類を安元は「自主動詞」と「非自主動詞」に分けている。自主動詞は動作主が意識的に行う動作行為、非自主動詞は動作主がコントロールできない或いは自然発生的な出来事であると指摘している。自主的意味をもつ動詞の結果補語構造から結果性可能補語への変換例として、下記のようなものを取り上げる。

听懂(聞いて分かる) ⇒ 听得懂 / 听不懂(聞いて分かる/分からない)
看清(見てはっきりする) ⇒ 看得清 / 看不清(はっきり見えた/見えない)
买到(買った) ⇒ 买得到 / 买不到(買うことができる/できない)
写对(正しく書く) ⇒ 写得对 / 写不对(正しく書ける/書けない)

従って、「V+C」構造の「V+ “得 / 不+C」構造を肯定形式及び否定形式といった
「全変換」できる**条件2**は、
C(結果事象)が「プラス評価」または、「中性的評価」の意味を表す語である。

張国憲(2006:159)は、結果補語の構文義について、コントロール不可、客観及び既然の集合であると指摘している。動作主がある動作をしてから現れた結果は無意志で、言い換えればコントロール不可・客観的・既然的である。つまり、動作を行った結果としてよい結果、中性的結果、悪い結果のどれも生じるのである。よって、この無意志或いはコントロール不可の結果を一般的常識に基づいて人々が通常に評価する際、1. 良い結果なら「プラス評価」と捉え、2. 中性的結果なら「中性評価」、3. 悪い結果なら、「マイナス評価」と捉えるといった三つの状況が生じる。C(結果事象)が「プラス評価」または「中性的評価」の場合の意味と語用例は下記の通りである。

「プラス評価」、「中性的評価」 結果補語→「V+ “得 / 不+C」構造に 「全変換」語用例	「マイナス評価」 結果補語→「V+ “得 / 不+C」構造に 「単変化可」または、「変換不可」の語用例
吃饱(お腹いっぱい食べる)→ 吃得饱/吃不饱 (お腹いっぱい食べられる/食べられない)	花光(お金を全部使い切る)→ 花不光 (お金を全部使い切れない)
办好(～をきちんとやる)→ 办得好/办不好 (～をやり遂げられる/られない)	弄坏(壊す)→ 弄不坏 (壊すことがない)
找到(見つかる)→ 找得到/找不到 (見つめることができる/できない)	读快(読むのが速い)→ 读不快 (速く読むことができない)
看懂(見て分かる)→ 看得懂/看不懂 (見て理解できる/できない)	睡少(睡眠不足)→ 変換不可
说清楚(はっきり言える)→ 说得清楚/说不清楚 (はっきり言える/言えない)	做咸(塩からく作る)→ 変換不可

また、安元(2009:73-109)は、方向補語から方向性可能補語への生成及び変換条件として、下記のような考察結果を得ている。

「V+D」構造の「V+ “得 / 不+D」構造に変換できる**条件1**は、
VDのV項(原因事象)は「自主的意味」特徴を持つ

ここの「自主的意味」は、方向補語から可能補語への変換条件として、VDのV項の自主動詞と同じく、動作主が意識的に行う動作・行為を指している。自主的意味をもつ動詞の方向補語構造から方向性可能補語への変換例を下記のように取り上げる。

- 搬来（運んで来る） ⇒ 搬得来/搬不来（運んで来られる/来られない）
 看出（見て結果が分かる） ⇒ 看得出/看不出（見て結果が分かる/分からない）
 买下来（買ってしまふ） ⇒ 买得下来/买不下来（買える/買えない）
 说下去（言い続ける） ⇒ 说得下去/说不下去（言い続けることができる/できない）

「V+D」構造の「V+“得/不+D”」構造を肯定形式及び否定形式といった
 「全変換」できる[条件2]は、
 D（結果事象）が「プラス評価」または「中性的評価」の意味を表す語である。

「プラス評価」、「中性的評価」 方向補語→「V+“得/不+D”」構造に 「全変換可」語用例	「マイナス評価」 方向補語→「V+“得/不+D”」構造に 「単変換可」または、「変換不可」の語用例
找出来（みつかふ）→ 找得出来/找不出来 （探せる/探せない）	染上(病毒) → 染不上 （バイ菌に伝染）→（バイ菌に伝染することがない）
挺过来（我慢できる）→ 挺得过来/挺不过来 （我慢できる/できない）	（身体）倒下 → 倒不下 （体が倒れる）→（体が倒れることがない）
滑过去（滑って行く）→ 滑得过去/滑不过去 （滑って行ける/行けない）	胖下去 → 変換不可 （太っていく）
穿起来（着る）→ 穿得起来/穿不起来 （きちんと着られる/着られない）	错下去 → 変換不可 （ずっと間違い続ける）

結果補語や方向補語から可能補語への変換条件を論じる安元の考察では、結果性または方向性可能補語の生成条件は、「V+C/D」構造の動詞が自主動詞であると同時に、結果補語または方向補語を含む結果事象（C/D項目）全体を「プラス評価」または「中性的評価」と捉えることができることである。そして、可能補語に変換できない、または、否定形変換しかできない（単変換可）ものは、「V+C/D」構造の動詞が自主動詞で、結果補語または方向補語を含む結果事象（C/D項目）全体が「マイナス評価」と捉えられるものである。

上記考察の結果に基づいて、学習者に変換可能または変換不可能の条件を説明し、結果事象（C/D項目）の「プラス評価、中性的評価、マイナス評価」をジャンル別に実際の例文で理解させ、シンタックス（構文法）によるフレーズ作りを取り入れ、実際の応用例と共に教えることを提案したい。

4. “能”形式可能構文と可能補語

4.1 “不能看见”、“看不见”と“没看见”

中国語の可能表現には助動詞可能表現（主に“能”形式可能構文）と可能補語の2タイプがある。そして、可能表現の否定形も基本的に可能表現の否定形と否定を表す副詞“不/没”+助動詞の形がある。学習者にはこの2タイプの可能表現を把握しにくいゆえに、下記のような誤用文が後を絶たない。下記誤用文は、可能表現の否定形と結果補語の否定形の間違いでもある。

- * 黑板上的字太小了,我不能看见。
 黑板上的字太小了,我看不见。（黑板の上の字が小さすぎて、私は見えない。）

* 他昨天病了没来,我看不见他。

☞ 他昨天病了没来,我没看见他。(彼は昨日病気で来なかったの、彼に会わなかった。)

* 这个周学的新单词真多,我不能记住。

☞ 这个周学的新单词真多,我记不住。(今週学んだ新出単語が本当に多いので、私には覚えられない。)

上記誤用文は可能補語と助動詞可能表現の使い分けの混乱及び可能補語の否定形と結果補語の否定形の使い分けの混乱により生じた間違いである。劉月華(1980)は、約 114.5 万字を検索した結果、“不能 VC / D”は4例しか見つからなかったと報告している。例えば、(例文は劉月華 1980 から引用)

(39) 黑板上的字有人还没抄完,不能擦掉。

(黑板の字は、まだ写し終わっていない人があるので、消してはいけいない。)

(40) 你不下苦功夫就不能赶上他们。

(君はよほど努力しないと、彼らに追いつくことができないよ。)

(41) 眼泪不能吓跑敌人,必须和敌人斗争。

(涙では敵を追い払うことはできない、どうしても敵と戦わねばならない。)

上記例文 39~41 が表している意味は、①許可しない、～をしてはいけいない、②～の状況がありえない、不可能、③～の状況が不成立、という意味である。劉月華は(1996: 482)人の事物に対する見方や主張を表す時には「“不能” + V +C/D」の形式を用いてもよいが、「主体的条件、客観的条件がある結果・方向の実現を許さない」ことを表す場合、ふつうは可能補語を用い、「“不能” + V + C/D」の形式を用いることは減多にないと述べる。たとえ「“不能” + V + C/D」の形式を用いても、文によっては成立しないことがあるとしている。例えば、

(42) 没有准备要发言,我怕说不好。

* 没有准备要发言,我怕不能说好。

(発言しようと思っていなかったの、うまく言えるかどうか心配だ。)

(43) 在哪儿见过那个小男孩儿,我怎么也想不起来了。

* 在哪儿见过那个小男孩儿,我怎么也不能想起来了。

(どこかであの男の子に会ったことがあるが、どうしても思い出せない。)

“不能看见、不能记住”のような“不能 VC / D”の成否については、安元(2009: 204)の研究が興味深い。まず“不能 VC / D”は「自主可能」⁶⁾においては基本的に存在しないと思われるという。その原因は、“不能 VC / D”の意味をあえて言い表すと、「ある動作の実現が不可能なら、ある結果の出現も不可能である」となるが、動作の結果も含まれる構文において、動作を無しにして結果は語れないからである。つまり、ある動作が実現しないということは、イコール動作主が動作をしていないことになるので、結果が生じるわけがないのである。結論として、「動作実現不可能」を表す場合には専ら“不能 V”を用い、「結果出現不可能」を表す場合には専ら“V 不 C / D”を用いると言えそうである。

4.2 “能进去吗”と“进得去吗”

杉村(1991: 156)は、可能不可能の根拠を客観世界に基づくものと主観世界に基づくものに大別にし、補語は客観世界による可能表現のみに対応し、助動詞“能”形式可能構文は主観世界に対応する、としている。例えば、

(44) 妈妈对孩子说,钱不能放嘴里啊,吃到肚子里就吐不出来了,要开刀的。

(母親は子供に、お金は口に入れてはいけいないよ。食べたなら吐けなくなって、手術しなくてははいけいないと言っている。)

主観世界に基づく可能表現には助動詞“能”形式可能構文が用いられる。例(44)“不能放嘴里(口に入れてはいけいない)”は「入れるのは物理的には可能だが、入れることは許されない」⇒主観的判断として「～をしてはいけいない」という意味を表す。“吐不出来(吐いても出て来ない)”は、客観性事実として発生しうる状況を表し、実際問題として「お金を吐いても出てこない」という意味を表す。

(45) 问: 没有票的小孩儿, 能进去吗?

(チケットがない子供は、入れますか。→入場できるかどうかの可能性を聞く)

回答：对不起，不能进。（申し訳ないが、入ってはいけない。→ 許可しない）

* 对不起，进不去。

(46) 问：没有票的小孩儿，进得去吗？

（チケットがない子供は、入れますか。→入場する方法を聞く）

回答：对不起，进不去。（申し訳ないが、入れない。→ 方法がない）

* 对不起，不能进。

上記例文(45、46)は、チケットがない子供の入場の可否を尋ねるもの(45)と、どのようにすれば、入場ができるか、その方法を聞く表現(46)である。“能”形式可能構文と可能補語表現は異なる意図を表現する構文である。

また、例文(45)は、チケットがない子供の入場が可能かどうかを聞いているので、相手の主観的判断に基づく“能”形式可能構文を用いるべきである。例文(46)は、チケットがない子供はどのような方法で入場できるか、動作“进（入る）”に対して、ある結果/方向の実現を許すかどうかを聞く場合なので、可能補語を用いなければならない。いわゆる客観的判断に基づいて実現可能かどうか、実現を許すかどうかを表す場合は、可能表現が使用されるのである。

4.3 「可能意の強弱」と“能 VC/D”、“V 得 C/D”

“能”形式可能構文は、主に「主観的能力、客観的可能性、情理や環境で許可されるか否か」という文法的意味をもっている。一方、可能補語は、動作実行後、結果の出現が可能か否かを述べる。

“能”形式可能構文の基本的意味：

ある動作の実現が可能・不可能であることを表す。

可能補語の基本的意味：

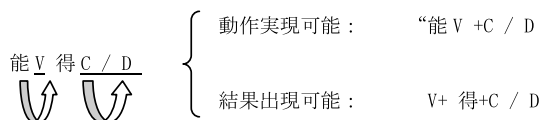
ある動作を実現後、ある結果の出現が可能・不可能であることを表す。

可能補語の構文的意味：

話し手がある動作を実現後、一定の状況下で、ある結果出現の可能性に関する判断を行う。(ただし、話し手が現実世界を基盤とした想像空間で判断を行っていること。(安本 2009))

劉月華（1980）は、「多くの文法書は“V 得 C/D”の前に“能”を加え、「可能」の意を強化することができると指摘している。私見では、これは“V 得 C/D”に限定して言えることである。……これは“能 VC/D”と“V 得 C/D”が同時に機能している混合形式であり、“能”は余分な成分である。語気の肯定程度から見れば、“能 V 得 C/D”は“能 VC/D”と“V 得 C/D”の間である（すなわち、“能 VC/D” > “能 V 得 C/D” > “V 得 C/D”）」という見解を示している。

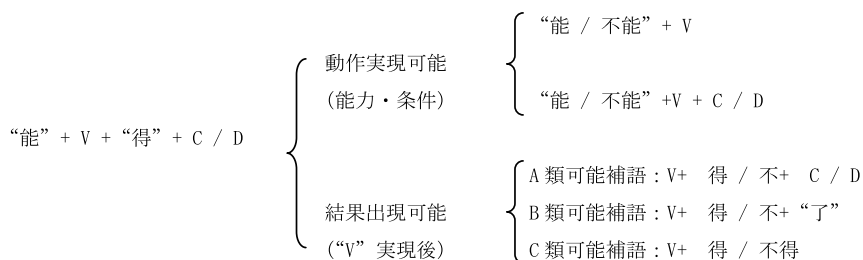
安元（2009：177-178）は、「“能 VC/D”は動作実現可能性に重点を置き、結果出現の可能性を省略している。“V 得 C/D”は結果出現可能性に重点を置き、動作実現の可能性を省略している。“能 V 得 C/D”は、最も正確に可能の意味を言い表し、そして形としても意味としても最も整っている可能表現である」と述べている。本稿は、基本的に安元のこの説を支持し、“能 V 得 C/D”は動作の実現及び結果出現の可能性の両方を言い表す形式であり、語気の肯定程度は最も強いと考える。すなわち、



“能 V 得 C/D” > “能 VC/D” > “V 得 C/D”

中国語可能表現における各形式は図 4. 3. 1-1 を参照されたい。

4. 3. 1-1 中国語可能表現における各形式の関係図



朱德熙、呂叔湘、丁声樹、郭春貴、呂文華、呂冀平、杉村などの先行研究を参考に、“能”形式可能構文と可能補語の使い分けをより分かりやすく学習者に示すために、下表にその基本的意味と構文の意味を整理した(表 4. 3. 1-2 参照)。

4. 3. 1-2 “能”形式可能構文及び可能補語の基本的意味と構文の意味

“能”形式可能構文の基本的意味		可能補語の基本的、構文の意味	
1	備わっている能力や力、高度な能力による可能	A 類	主体的条件(能力・力など)による可能
2	主観的能力、客観的可能性、事実による可能		客観的条件が(結果、方向の)実現を許すかどうか
3	環境や条件、情理、都合が許す場合の可能	B 類	主体的条件、客観的条件がある動作、 変化の実現を許すかどうか
4	用途がある; 長けていることによる可能		
5	情理の上から許されるかどうか、 ～をすべきかどうか	C 類	情理の上で許されるかどうか ～をすべきかどうか
6	連動構造(連動文)の可能性を表すこと		
7	許可すること		
8	主観世界の判断に基づく可能表現		客観世界に基づく可能表現

前に述べたように、可能補語の肯定形と否定形の使用頻度が極端に異なることはよく知られている。可能補語に関する理論的な問題の最も重要な点はこの極端の使用頻度の差にあると言っても過言ではない。この問題に関しては、大河内(1980)の議論の展開が見事である。主要動詞の後ろに続く動詞や形容詞の否定は、単に結果の否定ということにとどまらず、動作実現後の方向性をも否定することによって、その動作行為全体の実現性を否定し、ひいては不可能を表明するのであり、そこに可能補語の本質があるという。

大河内(1980)は、“V 得 C/D”を“V 不 C/D”の素直な肯定形ではなく、“V 得 C/D”は、“V+C/D”に希薄な可能の意味を強めた「強意の可能形式」と見る考えを提案している。可能補語の肯定形“V 得 C/D”は、疑問文や反語で用いられるものが多く、“V 不 C/D”の使用頻度と比べ著しく絶対的使用頻度が低い。肯定形可能表現の“V+C/D”に“能/可以”を冠した“能/可以+V+C/D”の使用頻度は決して低くはない。さらに、大河内は、結果がすでに実現し、その状態を描写するに過ぎない場面では、“V 得 C/D”が有効に働くが、「蓋然性」に対しては“能/可以+V+C/D”が積極的に働くとし、次のような例をあげている。

(47) 从纱门望出去, 花园的树木绿荫荫的, 听得见蝉声。 (描写的表現)

(網戸から外を眺めると、庭園の樹木は緑濃く繁り、ゼミの声が聞こえていた。)

(48) 学汉语不太难, 只要多听多说, 就能学好。 (推論的表現)

(中国語を勉強することはあまり難しくない。たくさん聞いてたくさん話しさえすれば、中国語ができるようになる)

る。)

4.4 結果重視の言語—中国語

杉村 (1988 : 218) が言うように、中国語は“V+C/D”という表現形式を非常に好む言語である。状況に応じ即興的に“V+C/D”という形式で表現できるか否かを中国語の習熟度を見る目安の一つとすることは十分可能である。いわゆる、動詞がハダカのまま使われる構文は命令文や反語文、疑問文以外では非常に少ない。例えば、“买(買う)”だけでは、何を伝えようとしているのか、意味が不明瞭で、聞き手は「買う」という動作の結果や方向性まで聞かないと思疎通ができないであろう。「買う」という動作に対して、その結果或いは方向を合わせて述べない限り、「買う」だけでは疑問文や命令文、反語文以外の文は成立しにくい。したがって、話し手が意図を伝達する際に、動詞+結果補語/方向補語、例えば、“买(買う)⇒买到(買うことができた)/买好(ちゃんと買った)/买贵了(高く買った)/买回来(買って帰ってくる)、学(学ぶ)⇒学好(ちゃんと学んだ)/学到了(学ぶことができた)/学烦了(厭になるほど学んだ)/学起来(学び始める、学んで見ると)”などと補語を用いる形式が一般的である。

5. 可能補語をどう教えるか

では、どのように可能補語を教えるべきかについて考えてみよう。すでに述べてきたように、可能補語は結果補語(或いは方向補語)との関係の中で捉えられねばならず、両者は一体のものとして考えるべきである。本稿のしめくりとして、提案したい補語教授法は、シンタックス(構文法)も考慮に入れ、中国語の結果事象重視の視点から、結果補語や方向補語と可能補語の関連を密接に保ちながら、①動詞(動作)→②動作が実現した(動作の結果・結果補語、動作の展開方向・方向補語)→③動作が実現しなかった(結果補語・方向補語の否定形)→④動作が実現していない(可能補語の否定形)への一貫した説明を行うことを提案する。すなわち、語⇒連語化した補語⇒フレーズ⇒コンテキスト表現(中国語:語素⇒語群⇒語篇)といった語⇒連語化した補語⇒フレーズへの展開⇒段落ごとの意図表示への展開を目指すという段階的教授法を勧めたい。

そこで、補語を教える全体の流れを下記のように提案する。

語	連語化した補語				コンテキスト表現
動作	動作が実現する	動作が実現した	動作が実現しなかった	動作が実現していない (可能補語の否定形)	A: 你到上海 <u>吃到</u> 上海螃蟹了吗? B: <u>吃到了</u> 。我们买得太多了, <u>没吃完</u> 还剩下好多。吃到一半 儿,我觉得我都 <u>吃累了</u> , <u>吃腻了</u> 。 都说上海螃蟹好吃,可我却 <u>没吃出</u> <u>来</u> 有什么好吃的。 A: 啊?!你 <u>吃不出来</u> 有什么好吃的? 你真够奢侈的!
	VC/D	VC/D+了	没+ VC/D	V 不 C/D	
	吃到	吃到了	没吃到	吃不到	
吃	吃完	吃完了	没吃完	吃不完	
	吃惯	吃惯了	没吃惯	吃不惯	
	吃腻	吃腻了	没吃腻	吃不腻	
	吃出来	吃出来了	没吃出来	吃不出来	

訳: A: 上海に行って上海蟹を食べたの?

B: うん、食べたよ。たくさん買いすぎて、食べきれなくて、ずいぶん残ったよ。食べている最中、食べることに疲れて、飽きちゃいましたよ。皆は上海蟹が美味しいというけど、私には何が美味しいかさっぱり分からない。

A: あら?!何が美味しいか分からないの? 本当に贅沢だなあ。

ここで注意すべきことは、可能補語の肯定形は否定形より使用頻度が極めて低いという事実である。ゆえに、可能補語に関しては、まず教えるべきことは否定形であり、肯定形はその後、疑問文や反語文に使われることを教えるべきだと、筆者は考える。

補語の教え方としては、主として「語用論」とそれに関連した「構文論」(シンタックス)の観点から説明すべきだと考える。ここに述べたような導入をスムーズに行うには、語・動詞としての意味と動作実行後の結果・展開・方向変

換を表す一つの連語化した補語への展開、さらに、連語化した補語がフレーズの中の一語になった際の、コンテキスト表現との関連を学習者にイメージさせ、応用・展開していくことが大切だと考える。最後に、補語を教える順序として、結果補語、方向補語、可能補語（否定形⇒肯定形）というように、教える側は配慮することが必要だと考える。

付記：本稿の執筆にあたっては、日本語の校正に貴重な時間を割いてくださったばかりか大変有益な修正意見を寄せてくださった西川孝次先生と編集委員会の方々に心から御礼申し上げたい。

注

1. 結果補語の構造としては、粘着型動補構造の一つとして、動詞+動詞(V+V)、動詞+形容詞(V+Adj.)の型がある。「V+V 構造」は、Verb+Verb によって構成され、「V+Adj. 構造」は、Verb+Adjective によって構成される。「V+C 構造」は、「V+V 構造」と「V+Adj. 構造」を合わせた言い方である。
2. 影山(1996)は、「使役」の出来事は、通常ある実体が別の実体に何らかの働きかけを行い、後者がある変化を経て、結果状態へと至る、というように連鎖的に展開することであると論述している。
3. 呉福祥(2002: 37)は、「ある結果が空間移動の実現の可能性を持つことを否定する」を文法化して“V 不 C”構造になった時期は最も早く(宋代)、「ある結果が実現の可能性を持つ」を文法化して“V 得 C”構造になった時期はそれに続き(元・明代)、「ある空間移動が実現の可能性を持つ」を文法化して“V 得 D”構造になった時期は最も遅い(清王朝)」と指摘している。同文献から、“V 不 C”の文法化は“V 得 C”より早く完成され、使われていることが伺える。
4. 魯曉現(2008: 183)「以“能”为纽带的现代汉语可能表达系统」『日本語と中国語の可能表現』白帝社から二次引用。
5. このタイプの動詞の後にアスペクト助詞の“了”が用いられると、“掉”(なくなる)のような意味も表す動詞。
6. 影山(1996)の「意志性」の有無による動詞の分類を「自主動詞」と「非自主動詞」にわけている。自主動詞は動作主が意識的に行う動作行為、非自主動詞は動作主がコントロールできない或いは自然発生的な出来事であると指摘している。この分類にしたがえば、「自主可能」とは自主動詞からなる可能表現で、「非自主可能」とは非自主動詞からなる可能表現である。“能”形式で例を挙げると、「你明天能来吗?(あなたは明日来られますか。)」における“来”は自主動詞なので、“能来”は「自主可能」に分類され、「地面能塌方吗?(地面が崩れるのか。)」における“塌方”は非自主動詞なので、“能塌方”は「非自主可能」に分類される。

参考文献

【中国語】

- 朱德熙(1982)『语法讲义』商务印书馆出版
- 刘月华等(1980)「可能补语用法的研究」『现代汉语补语研究资料』北京语言学院出版社
- 刘月华等(1983)『实用现代汉语语法』外语教学与研究出版社
- 刘月华等(1998)『趋向补语通释』北京语言文化大学出版社
- 刘月华(2003)「谈对外汉语教学语法」『对外汉语教学语法探索』国家对外汉语教学领导小组办公室教学处编
- 刘勰宁(2008)「可能性述补结构应该二分还是三分?」『日本語と中国語の可能表現』白帝社
- 吕文华(1999)『对外汉语教学语法体系研究』北京语言文化大学出版社
- 吕文华(2003)「关于对外汉语教学语法体系的若干」『对外汉语教学语法探索』国家对外汉语教学领导小组办公室教学处编
- 張黎(2006)「汉语的动相—从补语问题谈起」『中国語の補語』日中対照言語学会、白帝社
- 沈家煊(2010)「如何解决“补语”问题」『世界汉语教学』北京语言大学
- 金立鑫(2003)「漫谈理论语法, 教学语法和语言教学中语法规则的表述方法」『对外汉语教学语法探索』国家对外汉语教学领导小组办公室教学处编
- 张国宪(2006)「补语的句位义探索」『中国語の補語』日中対照言語学会 白帝社
- 卢福波(1996)『对外汉语教学实用语法』北京语言文化大学出版社
- 吕冀平(2000)『汉语语法基础』商务印书馆出版
- 彭小川、李守纪等(2004)『对外汉语教学语法释疑 201 例』商务印书馆出版

- 李英哲(2004)「从认知语言学角度看汉语内外向动词搭配上下类补语的现象」『第七届国际汉语教学讨论会论文集』第七届国际汉语教学讨论会论文集编辑委员会
- 李文浩(2009)「“动+补”结构及其相关问题的历史考察」『汉语学习』
- 李晓琪(2004)「“做不到”“做不好”与“做不了”——兼论汉语补语教学」『第七届国际汉语教学讨论会论文集』第七届国际汉语教学讨论会论文集编辑委员会
- 高桥弥守彦(2004)「论动补短语“走进来”」『第七届国际汉语教学讨论会论文集』第七届国际汉语教学讨论会论文集编辑委员会
- 申莉(2011)「“V得/不了”与“V得/不着”的构式分析」『语言教学与研究』No. 148
- 鲁健骥(1984)「Directional Complement:A pedagogic view」『中国语文教师学会学报』1984. 2
- 张威(2008)「有对自动词无标记表示的可能义—结果可能义」『日本語と中国語の可能表現』白帝社
- 鲁晓琨(2008)「以“能”为纽带的现代汉语可能表达系统」『日本語と中国語の可能表現』白帝社

【日本語】

- 金田一春彦「時・態・相及び法」『日本文法講座Ⅰ総編』明治書院
- 朱德熙著、杉村博文、木村英樹訳(1995)『文法講義』白帝社
- 劉月華他著、相原茂監訳(1996)『現代中国語文法総覧』くろしお出版
- 大河内康憲(1980)「中国語の可能表現」『日本語教育』No. 41
- 望月八十吉(1997)「日中両国語における能格的表現」『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版
- 望月八十吉(1994)『現代中国語の諸問題』好文出版
- アン・Y・ハシモト著、中川正之、木村英樹訳(1986)『中国語の文法構造』
- 杉村博文(1988)「可能補語の考え方」『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版
- 奥水優(1985)『中国語の語法の話—中国語文法概論』光生館
- 奥水優、島田亜実(2009)『中国語分かる文法』大修館書店
- 呂叔湘著、牛島徳次、菱沼透他訳(1992)『中国語文法用例辞典—現代漢語八百詞贈訂本』東方書店
- 相原茂、荒川清秀、杉村博文(2000)『どちらがう？中国語類義語のニュアンス』東方書店
- 郭春貴(2001)『誤用から学ぶ中国語』白帝社
- 藤堂明保、相原茂(1985)『新訂 中国語概論』大修館書店
- 影山太郎(1996)『動詞意味論』くろしお出版
- 安元真弓(2009)『現代中国語における可能表現の意味分析—可能補語を中心に』白帝社
- 安元真弓(2008)「可能補語使用時の制約要因」『日本語と中国語の可能表現』白帝社
- 呉麗君、西川和男(2005)『中国語の誤用分析』関西大学出版部
- 来思平、相原茂(1993)『日本人の中国語—誤用例54例』東方書店
- 張黎、佐藤晴彦(1999)『中国語表現文法』東方書店
- 小川郁夫(2000)『中国語文法・完成マニュアル』白帝社
- 杉村博文(1994)『中国語文法教室』大修館書店
- 松岡栄志、古川裕(2004)『現代中国語総説』三省堂
- 相原茂、木村英樹、杉村博文、中川正之(1991)『中国語学習Q&A』大修館書店
- 姚艷玲(2008)「「不可能」の言語化に関する日中両語の対照研究」『日本語と中国語の可能表現』白帝社
- 姚艷玲(2009)「日本人中国語学習者による「補語」の習得に関する横断的研究」『中国語教育』No. 7
- 姚艷玲(2010)「日本人中国語学習者による「補語」表現の習得研究」『中国語教育』No. 8

- 石村広 (2000) 「中国語結果構文の意味構造とヴォイス」『中国語学』日本中国語学会 No. 247
- 呂才楨他 (1986) 『日本人の誤り易い中国語表現 300 例』光生館
- 安藤好恵 (2000) 「“他想死我了” 文における主体の位置」『中国語学』日本中国語学会 No. 247
- 山田留里子 (2008) 「可能補語—何を教えるか」『日本語と中国語の可能表現』白帝社
- 高橋弥守彦 (2008) 「可能表現に用いる能願動詞“能”」『日本語と中国語の可能表現』白帝社
- 張岩紅 (2008) 「日中対照研究から見る可能表現—見える、見られる、見ることができる」『日本語と中国語の可能表現』白帝社
- 植村麻紀子 (2006) 「初級段階で扱う「方向補語」について」『中国語教育』No. 4
- 伊藤さとみ (2003) 「中国語の可能補語」『日本東洋文化論集』No. 9